

# 琉球大学学術リポジトリ

## 沖縄の災害情報に関する歴史文献を主体とした総合的研究

メタデータ	言語: 出版者: 高良倉吉 公開日: 2009-02-27 キーワード (Ja): 沖縄, 琉球, 災害史, 地震津波, 異常気象, 歴史文献情報 キーワード (En): 作成者: 高良, 倉吉, 山里, 純一, 豊見山, 和行, 真栄平, 房昭, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, Takara, Kurayoshi, Yamazato, Jyunichi, Tomiyama, Kazuyuki, Maehira, Fusaaki, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/8987">http://hdl.handle.net/20.500.12000/8987</a>

# ことわざにみる自然災害（おぼえがき）

かりまた しげひさ

## 1 はじめに

ことわざは、みじかい表現のなかに、それが生まれ、使用された時代の自然、社会、人間に対する人々の感情や評価が反映されている。ことわざは地域社会の共通の知的財産であり、若者や子どもたちの教育の手段として継承されてきた。ことわざは、短歌や俳句とならぶほどの、なかには、俳句よりもみじかいものもあるほどみじかい不定型の言語作品である。おぼえやすく唱えやすいリズムをもち、簡潔でわかりやすいことから、生活のさまざまな場面で行動の指針としてあたえられるものもあれば、先人たちの蓄積してきた知識としてあたえられるものもある。

本稿では、かりまたしげひさ・上村幸雄編（2002）『石崎公曹の奄美のことわざ』、仲井真元楷（1971）『沖縄ことわざ事典』、吉村玄得（1974）『沖縄宮古ことわざ全集』、かりまたしげひさ、玉城政美他（1998）『宮古フォークロア』、宮城信勇（1977）『八重山ことわざ事典』をテキストに奄美大島、沖縄島、宮古島、石垣島のよっつの地域のことばで語られてきたことわざのなかから自然災害に関することわざをぬきだして考察した。

『石崎公曹の奄美のことわざ』は、奄美大島龍郷町瀬留出身の石崎公曹氏が収集したことわざ集で、1078 編のことわざが掲載されている。仲井真元楷（1971）『沖縄ことわざ事典』には 788 編のことわざが掲載されている。吉村玄得（1974）の宮古島市平良西里のことわざを宮古島市城辺保良方言話者に確認して得た 564 編、および、かりまたしげひさ、玉城政美他(1998)のネフスキーが採集した 62 編、計 626 編のことわざを対象にした。『八重山ことわざ事典』には 1057 編の石垣市新川方言のことわざが掲載されている<sup>1</sup>。

よっつの地域のことわざの総数は、3549 編で、そのなかの自然災害関係のことわざは 34 編であった。ことわざを収集した著者の関心や、収集された地域の特性にもよるとかんがえられるが、その総数に比して、そこに掲載された自然災害に関することわざの数が 34 編というのはいかにも少ない。

34 編のうち、台風に関するものが 18 編で、次いで低気圧にともなう季節風に関するものが 5 編、早魃（旱）に関するものが 3 編、長雨に関するものが 3 編である。地震、津波、竜巻などに関することわざはみられなかった。

---

<sup>1</sup> 本稿では、かりまたしげひさ・上村幸雄編（2002）、仲井真元楷（1971）、宮城信勇（1977）の表記をふくめ、用例をそのまま採用した。

## 2 台風と関連することわざ

天気予報などのなかった時代、「台風銀座」ともよばれる琉球列島の人々にとって、毎年やってきて甚大な被害をもたらした台風は、さまざまな自然現象のなかでもおおきな関心事であったにちがいない。台風に関するものが 19 編のうち、台風接近の予兆に関するものが 8 編、毎年の台風の多寡に関するものが 8 編、台風に関する禁忌をいうことわざなどがある。

### 2.1 奄美大島の台風と関連することわざ

#### 1) 蜂ぬ 低さん どろなん 巣 作れば 台風。

（蜂が低いところに巣を作ると台風の年になる。）

※蜂は本能的に台風を予想し、台風多発の年には、人の腰から下の高さのところ（地上すれすれのところ）に巣を作るといわれている。

#### 2) 巳ぬ年 台風や 家倉 倒しゅん。

（巳の年の台風は、猛烈で、家や倉まで吹き倒す。）

※巳の年の台風は大型台風で、すごく吹き荒れるといわれている。

#### 3) 七月 しゅく 荒れ。

（旧暦七月の海は、シュク（アイゴの子）とともに荒れてしまう。）

※アイゴの子が台風余波の荒波にもまれて打ち寄せられてくる。このころ、台風が南方海上でよく発生し、台風余波で海鳴りがして、大きくうねった高い波が流れ藻や小魚をまきこんで岸边に打ち寄せる。

#### 4) 梅雨ぬ 上がりんや 家ぬ いっきゃ 取て 待て。

（梅雨があがったら、家の屋根のまげ（かやぶき屋根のてっぺんで竹などを通して固定したところ、イラカ薨）をやりかえて、次にやってくる台風を待て。）

※梅雨が終われば、まもなく台風がくるから、そのそなえをしておけの意。

#### 5) 稲ぬ うしきやらんうち 鼓 打てば 台風ぬ 吹きゅん。

（稲を処理しないうちに鼓を打つと、台風が吹く。）

※稲を刈り終わるといふ稲作農事のけじめをつけないうちから、遊びごとの鼓など打って踊るを楽しもうなどとすると、大自然の神が台風をもたらして罰を与える。

#### 6) 台風の 時 口笛や すんな。

（台風の時、口笛を吹いてはならぬ。）

※口笛は風を呼ぶといわれている。口笛を吹くとその家に台風がどっと当たってくる。台風ときは、口笛だけでなく、鳴りもの（音曲）は一切禁じられる。奄美ではモミガラやヌカをとばす作業時に口笛を吹いて風をよぶ。

#### 7) 台風ぬ 時 鳴りむん 鳴らすな。

（台風ときに音の鳴るものを鳴らしてはならぬ。）

※太鼓や三味線、はては口笛にいたるまで禁じられる。音色が、風を呼ぶといわれている。野良仕事や脱穀仕事するとき、口笛を吹いて風を呼ぶ習慣がある。

#### 8) 台風ぬ 翌日や 舟 出じゃし。

（台風一過の翌日は、舟を出せ。）

※海は静かになって、かえって航海には安全である。

9) 南風ぬ・長停滞 しりば 物破りぬ 元。

(南風が一か所に長く停滞すると、自然界が気候不順で狂う原因。)

※南風停滞のために季節外れの台風がやってきたり、長雨続きのあと、日照りが続いたりして、自然界の調和が平年に比べてこわれてしまう。

2.2 沖縄島の台風に関することわざ

10) かし ふけえ けえせえ ねえに。

(台風・吹けば 返し風は ないか。)

2.3 宮古島の台風に関連することわざ

11) ka:nu midznu kadzu:tʃika:, upukadzinu=du fks.

(井戸の 水が 増えると、 大風(台風)が 吹く。)

12) akabi:znu tubztʃika:, upukadzinu=du fks.

(赤とんぼが 飛んだら、 大風(台風)が 吹く。)

13) turanupanu imnu naztʃika:, kadzinu=du fks.

(寅の方向の 海が 鳴ったら 風(台風)が 吹く。)

14) tusi:padzimi turanupanu imnu natsika: kadzinudu fuki.

(年の初めに 寅の方角の 海が うなりだしたら、嵐が くる。)

15) karts:n kamtjumnu upusa naztʃika:, kadza: fkan.

(夏至に 雷が 多く 鳴ると、 風(台風)は 吹かない。)

16) patsnu ssnu uin tsfaitʃika:, upukadza: fkan.

(蜂の 巣が 上に 作られたら、 大風は 吹かない。)

17) biinu mo:tsika: kadzinudu fuki.

(トンボが 宙を 舞い飛ぶと、嵐が 来る。)

18) dzu:gujanu ju:n aga:n ffumtsika: ja:nidussa kadzinudu fuki.

(十五夜の 夜に 東が 暗くなると 次の年は 嵐になる。)

2.4 石垣島の台風に関連することわざ

19) じゅんぐわづいかぜー に一ついきいしん うがすいん。

(十月の風(台風)は 根付石も 動かす。)

3 低気圧にともなう季節風に関することわざ

旧暦の2月ころ発生する低気圧を「二月風廻り」あるいは「台湾坊主」などとよぶが、それに関することわざが奄美で2編、宮古で2編あった。奄美の20)、21)は季節風のつよさを表現するものだが、「正二月」とその時期を特定している。宮古の23)、24)は低気圧のおさまる時期をいっている。奄美の20)、21)は時期を暦(旧暦)で特定し、宮古の23)、24)は、自然物の pjaimagannu ana (蟹の穴)、matsgi:nu jin (松の木の芯) の出現で低

気圧発生の時期を特定している。

### 3.1 奄美大島の強い季節風に関することわざ

#### 20) 正二月ぬ 南風や 三歳牛ぬ 角 折りゆん。

(旧暦の正月、二月のころに吹く南風は、時として三歳牛のまだ生えはじめたばかりの短い角でさえも、吹き折ってしまうほど強烈に吹くことがある。)

※奄美は春先とはいえ、まだ冬の偏西風が吹いているが、その偏西風のすき間を南風がねらって強烈に吹くことがある。これは本土の春一番と同じであろう。

#### 21) 正二月ぬ 南風や 礁 掴みとてん 流され。

(旧暦の正月、二月ごろに吹く南風は、岩礁に手をかけてすがりついていても流されてしまうほど烈しく吹くものである。)

※旧暦の正月、二月といえ、新暦の二月半ばから四月のはじめにかけての時期で、南の島々は気候の変わり時であり、北風と南風がせめぎ合い、南風が勝って本格的な春へと向かうころであり、北風とせめぎ合う南風の烈しさをいうことわざである。

#### 22) 神ぬ月や 船出し すんな。

(神の月（正月、四月、九月をいう）に船出しをするな。)

※神の月といわれているノロ神の行事の多い月には、家にこもっているのが慣例であって、個人的な船旅などするものではない。「神の月」には旅、結婚、改葬などをすることを忌む習慣があった。ノロ神の祭り（豊作祈願）はだれもが心静かになすべき行事であったのであろう。

### 3.2 宮古島の強い季節風に関することわざ

#### 23) pjaɪmagannu ananu imkai nkja:nkja: nigatsukadzima:zza smain.

(蟹の 穴が 海に 向かわないうちは 二月風回りは おさまらない。)

#### 24) matsgi:nu jinnu tatankja: nigatskadzima:zza smain.

(松の木の 芯が 立たないうちは 二月風回りは おさまらない。)

## 4 早魃（早）に関することわざ

おおきな河川にめぐまれず、生活用水や農業用水をちいさな河川や井戸水に頼っていた時代の早魃、日照りも琉球列島の住民の生活をおびやかしてきた。その早魃・日照りの予兆をあらわすことわざが奄美で1編、宮古で2編あった。石垣島でも1編あったが、早魃そのものあらわすことわざではなく、比喩表現に使用されたものである。

### 4.1 奄美大島の早魃（早）に関することわざ

#### 25) ヒャンや 早ぬ とき 出じん。

(ヒャン（赤黒まだらの毒蛇。頭と尾が見分けにくい。奄美の人はヒャンは咬まずに尻尾で刺すと信じている。）は、ひでりのときに出てくる。)

※すこしでも潤いがあれば、けっして出てこない。ヒャン[hjaN]（ヒメハブ）が出る

と、当分は雨もなく日照り続きとなる。

#### 4.2 宮古島の早魃（早）に関することわざ

26) mtsn a:znu ssu: tsftjika:, pja:zn=du naz.

(道に 蟻が 巣が 作ったら、日照りに なる。)

27) ftsksn tsvnu uritjika:, ja:nja: psdiz.

(十一月に 露が おりたら、来年は 日照り。)

#### 4.3 石垣島の早魃（早）に関することわざ

28) ペーれーばたぎぬ あーんやー。

(早の畑の畑の 粟のように。) 髪の毛が疎らに生えている様子。

### 5 長雨に関することわざ

長雨に関する 3 編のことわざを以下にあげる。奄美大島の 29) は長雨のおわる時期、宮古島の 30) は、長雨の降りをはじめの時期についてあらわすことわざで、この長雨を必ずしも自然災害とみてよいか断定できない。29) の長雨は石崎公曹が解説でかいているように、梅雨であり、宮古島の 30) の長雨も梅雨をさしている可能性がある。

#### 5.1 奄美大島の長雨に関することわざ

29) 蘇鉄ぬ 花ぬ あがりば 長雨や あがり。

(蘇鉄の雄花がしぼめば、梅雨のあがり時。)

※蘇鉄の雄花 (砲弾型の花) がしおれて倒れ、その役目を果たすころ、梅雨もあがるのである。

#### 5.2 宮古島の長雨に関することわざ

30) imduznu agin nakstjika:, nagaaminudu fz

(海鳥が 陸で 鳴いたら、 長雨が 降る。)

31) amakadzi ja:ssu

(雨風は 飢饉。) 雨風、もしくは長雨がつづくとき飢饉になる。

### 6 その他

その他に興味深いことわざがあったので、参考にあげておく。

32) はネフスキーが大正年間に宮古島で採集したことわざで、月蝕が飢饉 (ja:ssu) の予兆としてあらわれることをあらわしたものである。月蝕を un (鬼) が tsikifu (月) を飲み込むと表現している。33) は奄美大島のことわざで、34) は石垣島のことわざだが、いずれも「ほうき星」が戦争の予兆としてあらわれることをいっている。32)、33)、34) は天体

現象と自然災害、戦争をむすびつけたことわざである。35)は、白百合の開花の多さが稲の不作とむすびつけられたことわざである。

32) unnu tsikifu: numtsika: ja:nidusi ja:ssunuda:i.

(鬼が 月を 飲み込むと (すなわち月蝕が起きると)、次の年は 飢饉になる。)

33) ほうき星ぬ 出じりば 戦さぬ おこりゆん。

(ほうき星が出たら、戦争がおこる。)

※すい星が夜空に現れるのは、戦争の前兆である。

34) ほういいぶしいぬ いでいっかー いくさ。

(ほうき星が 出たら、 戦争がおこる。)

35) 白百合ぬ 山なん がば 咲きゆん 年や 稲や 生まれらん。

(白百合 (野性のテッポウユリ) が野山にたくさん咲く年は、稲は豊作にはならない。)

※白百合は旧四月 (現在五月) に咲く。南風が吹き、稲田も青々と伸びはじめる頃である。そのころ白百合がたくさん咲きすぎると、豊作は期待できない。

## 7 雨に関することわざ

参考として雨に関する 10 編のことわざを以下にあげる。雨の降る予兆をあらわすものである。朝焼けを雨の予兆とした沖縄の 37)、宮古島の 41)、あるいは、月の暈を雨の予兆とした沖縄の 38)、宮古島の 40)、42)、同じく朝雷を雨の予兆とした奄美の 36)、石垣島の 43)など、ことなる地域でおなじ内容のことわざ、すなわち自然現象が雨の予兆としてあらわれている。

### 7.1 奄美大島の雨に関することわざ

36) 朝雷や 一日中ぬ 雨。

(朝のかみなりは、その日、終日の雨)

※朝、雷がなると、終日雨びたしになる。本土の「朝雷に隣歩きすな」「朝雷に戸開けず」に類する。

### 7.2 沖縄島の雨に関することわざ

37) あさやきや あみ。

(朝焼けは 雨。)

38) ちちに あまがさや あみ。

(月に 雨傘は 雨。)

### 7.3 宮古島の雨に関することわざ

39) majunu mipanau smitjika:, aminu=du fz.

(猫が 顔を 洗ったら、 雨が 降る。)

40) tskssunu amagasau kavtfjika:, aminu=du fz.

(月が 暈を かぶったら、雨が 降る。)

41) asajakja: unu pīnu ami. jusarabijakja: atsanu ami.

(朝焼けは その 日の 雨。 夕焼けは 明日の 雨。)

42) tsīkīfunu amagaso: kavtsīka: aminudu fui.

(月が 暈を かぶると 雨が 降る。)

#### 7.4 石垣島の雨に関することわざ

43) あさかなりいえ うふあーみ。

(朝雷は 大雨。)

44) すいとうむでいぬ たかぴかりいえ あーみ。

(早朝の 高光りは 雨。朝早く空高く光り輝いて晴れている日はよく雨になる。)

45) まやぬ うむてい すいみつかー あーみ ふおーん。

(猫が 顔を 洗えば 雨が 降る。)

## 8 地震、津波、竜巻など災害をあらわすことわざと方言語形

つぎの石垣島のことわざ 46)、47)で、「ない(地震)」「なん(津波)」の語が使用されているが、いずれも地震、津波そのものについてのことわざではなく、人の様子の比喩的な表現として使用されている。

46) ないぬ いかばん うぐ しゅくお あらぬ。

(地震が 来ても 動く ほどではない。)

47) なんぬ いかばん うぐ しゅくお あらぬ。

(津波が 来ても 動く ほどではない。)

うえのふたつを除外すると、地震も津波も、それに竜巻のことわざも1編もみられなかった。それは石垣島、宮古島、久米島、沖縄島北部(名護市幸喜)でおこなった臨地調査でもおなじ結果であった。参考に津波、竜巻の方言形をあげておく。

### 津波の方言語形

sigarinami 津波。また、高潮。(国立国語研究所編『沖縄語辞典』)

シガラナミ、または、シガリナミ 津波。高潮。(伊是名村教育委員会編『伊是名方言辞典』)

signami: 津波。(名護市幸喜方言)

signami: jujuN 津波が寄る。

?upu?u 津波。地震などによって突然おそってくる高い波。

?upu?u ?agajuN (津波が上がる)

干潮の差が最も大きい潮。ウーシュ、またはワリシュともいう。(菊千代・高橋俊三)



編著『与論方言辞典』

ウナン *u:naj* 〈大波〉 石垣、小浜（宮良當壯『八重山語彙』）

ウブナンヌイ *ubunannui* 〈大波上り〉 与那国（宮良當壯『八重山語彙』）

ナン *naj* 〈波〉 石垣、平得、真栄、白保、竹富、鳩間、波照間（宮良當壯『八重山語彙』）

ユルス *jurusi* 〈寄り潮〉 波照間（古語）（宮良當壯『八重山語彙』）

ユルスー *jurusu:* 〈寄り潮〉 新城（宮良當壯『八重山語彙』）

### 竜巻の方言語形

*ru:* 竜。 *du:* ともいう。想像上の動物。また、たつまき。たつまきは竜とみなされていた。（『沖繩語辞典』）

ハザマチ、または、ハジマチ 竜巻。旋風。（〈風巻き〉）（『伊是名方言辞典』）

?*ino:* 海の彼方に杵状に見える黒い竜巻。旋風。 *tiNnu niguinaN ?ino: nu sagatui*（天の根元に竜巻が下がっている。）（菊千代・高橋俊三編著『与論方言辞典』）。

*ino:* あるいは *ino:kazi* 竜巻。旋風。（宮城信勇編著『石垣方言辞典』）

## 9 ことわざの表現

かりまた（2006）<sup>2</sup>は、「～スレバ」「～スルト」「～シタラ」と現代日本語に訳できる *tjika:* 条件形や *iba* 条件形を従属文の述語にもつ従属複文がことわざの表現形式として使用される傾向を指摘した。これは自然災害のことわざにもあてはまるものである。*stariba*（シタノデ）、*ʃjiba*（スルノデ）条件形のあらかわす個別的、具体的な出来事間の原因・結果的な因果関係の発見から出発し、ふたつの出来事が反復的・習慣的にあられることの認識に発展して、それがことわざに表現されるとき、ポテンシャルな出来事の因果関係を表現する *tjika:*（シタラ、スルト）条件形をもつ条件的な従属複文が使用されるのだろう。

*turanupanu imnu naztjika:, kadzINU=du fks.*

（寅の方向の 海が 鳴ったら 台風が 吹く。）

一方、アクチュアルなできごとの因果関係をあらかわす、すなわち、*stariba*（シタノデ）、*ʃu:tariba*（シテイタノデ）、*ʃjiba*（スルノデ）、*ʃu:riba*（シテイルノデ）を従属文の述語にもち、個別的、具体的な出来事間の原因・結果的な関係をあらかわす原因的な従属複文はことわざにあられない。一般的、法則的な出来事、反復的、習慣的な出来事をあらかわすことわざの表現形式としてはあられにくいのだろう。

ことわざに *tjika:* 条件形や *iba* 条件形があられるとき、ふたつの出来事が条件的な因果関係でむすびついているのか、単なる時間的な継起性をあらかわしているのか判断しにくいものがすくなくない。ふたつの自然現象が連続して、しかも反復的にあられるとき、そこに

<sup>2</sup> 宮古島市城辺保良方言における出来事の因果関係をあらかわすつきそいあわせ文（従属複文）の研究報告である。詳細はかりまた（2007）を参照。

何らかの因果関係をみいだし、後続の自然現象の予兆としてとらえたのか、あるいは、単なる時間的な継起性をしめして注意を喚起しているのかのがわかりにくい。

蜂ぬ 低さん どろなん 巢 作れば 台風。

(蜂が 低い ところに 巢を 作ると 台風の年になる。)

akabi:znu tubztjika:, upukadzinu-du fks.

(赤とんぼが 飛んだら、 大風 (台風) が 吹く。)

現代科学の目でみると、そこにはどんな因果関係もみられないものなのだが、昔の人々は、思いもよらない因果関係をみいだしていたのかもしれない。そこには生命や生活を脅かす自然災害をなんとか克服しようとする気持ちがはたらいていたのだろうか。

地震、雷に関する言語伝承で興味ぶかいものとして、地震や雷をさける呪文のことばが外間美奈子 (1994) 「那覇方言の音声資料の収集とテキスト化」にある。

桑木ぬ 下 で一びる。(桑の木の下だ。)

雷や地震のときのまじないのことば。「クワーギヌ シチャ デービル。クワーギヌ シチャ デービル。クワーギヌ シチャ デービル。」と三回くりかえしていう。

また、国立国語研究所 (1963) 『沖縄語辞典』には、地震のときの呪文が掲載されている。

coozika (名) ①経塚 (略)。②地震の時の呪文の文句。首里の郊外にある経塚は金剛経が埋めてあり、地震のときにもそこだけは揺れないというので、地震のときには“coozika coozika” (「経塚経塚」) と唱える。

未確認だが、類似の呪文は各地にあるようだ。

ところで、地震や雷などに関することわざはみられないのに、呪文のことばが伝承されているのは、台風、季節風、早魃などの災害とことなり、地震や雷は、特に琉球列島においては、その発生が予測できず、不定期におきるものなので、ことわざとしてのこりにくかったからなのだろうか。地震や雷はひとたび発生すれば忌避することはできないが、呪文を唱えて被害を最小限におさえるよう願ったのだろう。

#### 参考文献

伊是名村教育委員会 (2004) 『伊是名方言辞典』

かりまたしげひさ (2007) 「宮古保良方言の条件形」『南島文化』、沖縄国際大学南島文化研究所紀要 41~62

かりまたしげひさ、上村幸雄共編 (2002) 『石崎公曹の奄美のことわざ』、255)

かりまたしげひさ、玉城政美、濱川真砂、高江洲頼子、渡久山由起子共訳 (1998) 『宮古のフォークロア』砂子屋書房

ことわざにみる自然災害（おぼえがき）

国立国語研究所（1963）『沖縄語辞典』大蔵省印刷局

菊千代・高橋俊三編著（2005）『与論方言辞典』

仲井真元楳（1971）『沖縄ことわざ事典』月刊沖縄社

外間美奈子（1994）「那覇方言の音声資料の収集とテキスト化—ことわざ・祈願（ウグワン）・  
物売りの言葉など—」『那覇の方言—那覇市方言記録保存調査報告書Ⅰ』沖縄言語研究セ  
ンター研究報告 3

宮城信勇編著（2003）『石垣方言辞典』

宮城信勇（1977）『八重山ことわざ事典』沖縄タイムス社

宮良當壯（1930）『八重山語彙』東洋文庫

（狩俣・繁久 琉球大学法文学部教授）